棚尾地区まちづくり事業
平成 27 年 1 月 22 日（木）19 時～
棚尾公民館 3 階

第４３回　棚尾の歴史を語る会　次第

進行（小笠原幸雄）

1　前回までのテーマに関する参考意見など
　棚尾の塩田、八柱神社の建造物など

2　テーマ 68　「春日社」
⑴　説明（磯貝国雄）

⑵　出席者による補足説明、感想など

3　テーマ 69　「おはま平七郎物語」
⑴　説明（磯貝国雄）

⑵　出席者による補足説明、感想など

4　連絡事項・情報交換など

5　次回日程
　第 44 回　2 月 19 日（木曜日）午後 7 時から　「新田の開発」「長冨公園」
　第 45 回　3 月 19 日（木曜日）午後 7 時から　「棚小校庭の造営物」「棚尾の橋」

棚尾の歴史を語る会　テーマ 68

「春日社」

1　要旨

明治時代の始めまで、棚尾小学校の東南に春日社があった。社地は棚尾小学校のプールの位置にあったと推定される。プールが出来る以前は忠魂碑のあった場所である。

そのため、当初棚尾小学校の東の字名は春日東であったが、明治 41 年（1908）に平和用水耕地整理事業が完成し、字名が春日に換わる。さらに昭和 48 年（1973）の新町名地番設定で現在の春日町と改正された。

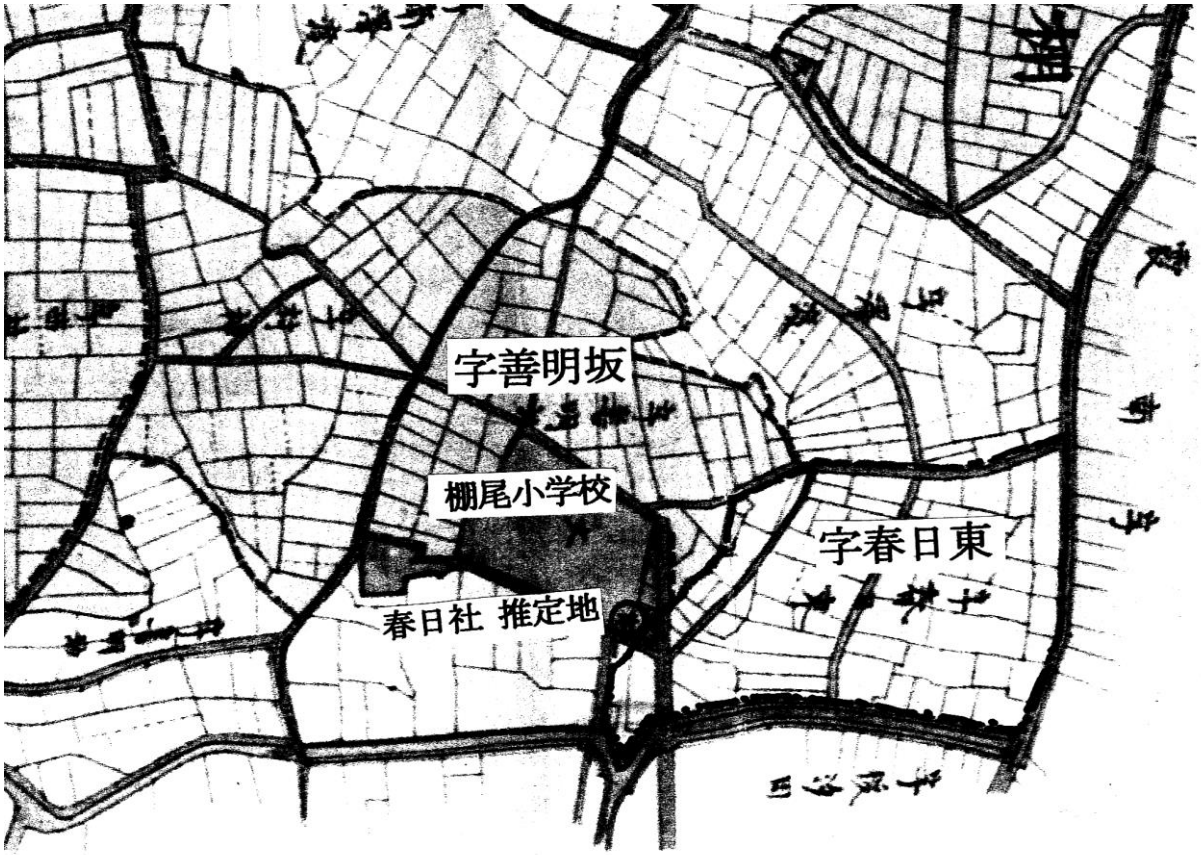
2　春日社に関する古文書

春日社に関する古文書を抜粋すると次の通りである。

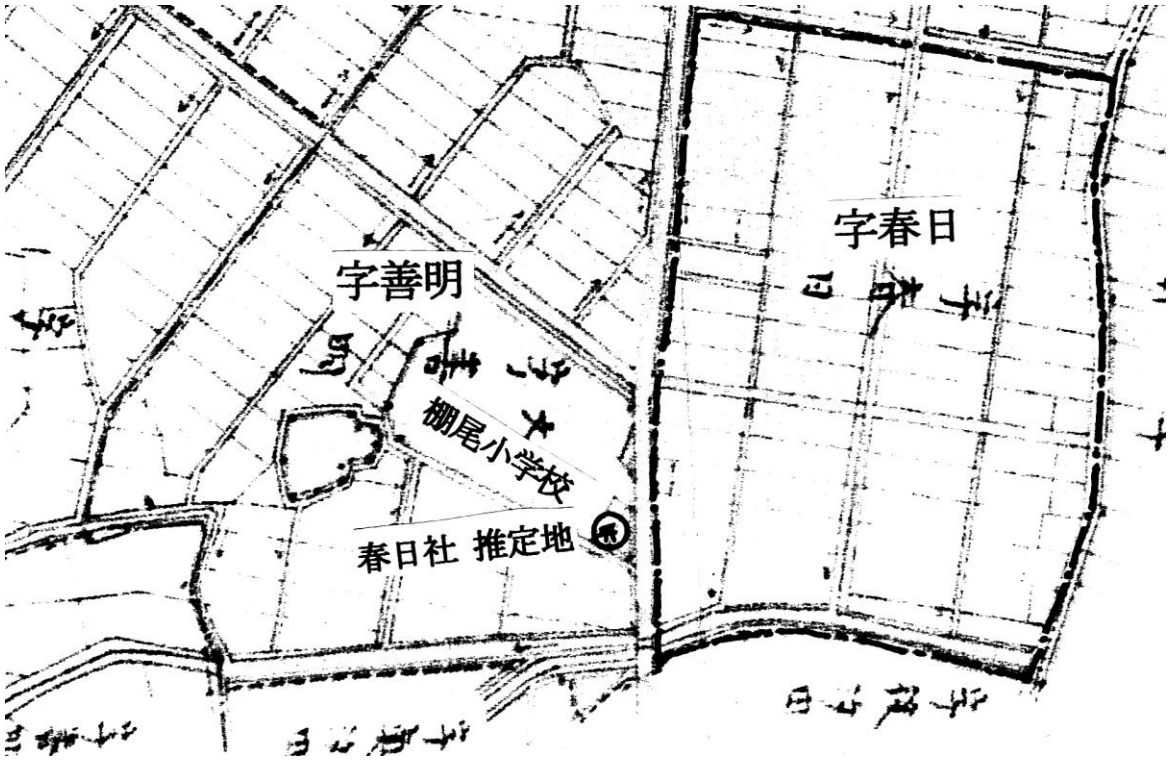
西暦	文書名	春日社に関する記載事項	文書に載っているその外の神社
1742	寛保 2 年明細帳	妙福寺内　**春日明神** 所：善明坂　　堂 2 尺四方、 社地：長 9 間　横 6 間	八王子、権現、神明
1753	宝暦 3 年明細帳	同上	同上
1762	宝暦 12 年明細帳	同上	同上
1770	明和 7 年明細帳	同上	同上
1782	天明 2 年	絵図に春日明神社と表記	八王子、蔵王権現、神明
1801	享和元年明細帳	寛保 2 年明細帳に同じ	寛保 2 年明細帳に同じ
1841	天保 12 年明細帳	御朱印地　**春日明神** 字善明坂　妙福寺控 社地：東西 7 間 2 分 3 厘 南北 15 間 4 分 6 厘	同上

		本社：3 尺 2 寸　2 尺 9 寸 4 分	
1870	明治 3 年神社取調書上帳	**春日社**　字善明坂 社地：但妙福寺朱印地古来之侭　東西 7 間　南北 15 間壱尺 本社　3 尺　四面 雨覆　奥行 7 尺　横 6 尺 木鳥居　高 7 尺　開 5 尺 祭神　天兒屋根命 武甕槌神 經津主神 比咩大神 勧請不相知	八王子、若宮八幡社、神明社、秋葉社、琴平社
1880	棚尾村誌明治 13 年	寛保 2 年と同じ	八王子、権現、神明
1899	本村沿革記録明治 32 年	記載なし	八柱神社、若宮社

⑴　明治 41 年以前の地図（耕地整理以前）



⑵　明治 41 年以後の地図（耕地整理以後）



⑶　昭和 48 年以後の地図（新町名地番設定後）

3　妙福寺春日堂

現在妙福寺境内に並んでいるお堂の中で、北から 3 番目に春日社が祀られている。

棚尾町の昭和 17 年調査書では、当時妙福寺境内には地蔵堂、春日堂、弘法堂及び秋葉堂の 4 堂が祀られているので、春日社は古くから祀られていることが分かる。

4　妙福寺と朱印地

江戸時代に明細帳によると春日社の地は朱印地であったことが分かる。朱印地とは江戸幕府が寺社に対して朱印状を下布してその所領を確認した土地である。又、妙福寺の朱印地に関し、昭和 7 年 3 月、棚尾町役場の「棚尾町史資料」の中に「御朱印元始の事」と言う古文書が有り、次の通りである。

「當寺御朱印之元始ハ　抑源家康公西尾之城ニ在（マシマス）時、鷹野之為ニ時々大濱ヱ御出有　七箇寺ヱ度々御入之時ハ寺僧共出合テ御馳走申折節ニ　寺々作分之田畑等永代所務可致義仰聞有ケリ　然トモ御墨付モナシ　其後各寺僧御朱印可被下旨　諸国ヱ御触有シニ　七箇寺各出府ス　當寺ニ相應傳瑞江城ニ至リテ訴訟申トイヱトモ中絶有ニ依リテ早速ニ不調依之　三箇年相結ケル

此内公方家ヨリ三河西尾城主伊井兵部正（※　1645 年に棚尾村は西尾城主伊井兵部少輔の領となる）仰付ラレ　寺々之田地ニ竿ヲ入　穀目ヲ御朱印ニ書入成サレ　七箇寺七本各御城ニ於テ御朱印頂戴致セリ　是レ御朱印之始也　其ヨリ以後

ハ　相継テ御判朱印物七寺別々ニ被下ケル

次、家綱公（4 代将軍）御代ニ及テ　御朱印可賜旨御触有　當寺文空良哲江戸ニ令下向　五十日相結亦御城ニテ頂戴ス

綱吉公（5 代将軍）之御代ニ及テ　御触有ニ依テ　當寺ニ良翁弘含代貞享元年（1684）甲子七月二十三日大濱七箇寺江戸下同　十月十六日先御朱印之為ヲ指上ケルニ御朱印不出　同月二十五日□國ス　其後三年ヲ経テ寺社之御朱印ハ　日本國中國々守護代官エ公方ヨリ渡リ　國々所々ニテ出ルナリ　大濱ハ其頃美濃部五右エ門殿預リ所ニテ有レハ（赤坂代官）　藤川驛ニテ十月六日五右エ門殿ヨリ七箇寺ニ御渡シ有之令頂戴畢

貞享三丙寅（1686）霜月三日　　文空良哲記

棚尾の歴史を語る会　テーマ 69

「おはま平七郎物語」

1　要旨

おはまと平七郎の二人が碧南市内の寺社を巡る物語で、大正 7 年（1918）に 5 代目永坂杢兵衛が志貴町の小笠原弥左衛門から聞いた話を題材に書き上げたものある。

2　出典

碧南市史料第 63 集「お者満平七郎物加多里　全」

碧南市史資料室の保管されている資料を平成 15 年 3 月に解読し印刷したものである。

3　おはま平七郎物語　　口演（上記出典の文章を更に現代語訳した）

恐れながら口上を以て御断り申上げ候　さてこの度おはま平七郎という　夢話の儀は去る天保六年末霜月夜長の頃かと覚ゆるに　村々古跡順拝の話　ほぼ承り候得ば　あらまし書留　各々様方お笑い草と　存知お伝え申上げたく　あまり狐を馬に乗せるとやら　前後分からず馬鹿らしく候得ずとも　前代未聞の話の種と思し召し　ご一覧下され候はば　有り難き仕合せ斜めならず候 もっとも此の儀は　夢かうつつかたわごとと　話す私も知らねども　もし思し召しあらば　よき所に目を付け　あしき所は耳をふさぎ　世のことわざに見ざる聞かざるもの言わざるとやら　言うこともあり　何卒ご勘弁になり　ご贔屓の程こい希い奉り上げ候　以上 天保七年申十二月中旬 棚尾村　作者青陽　敬白	天保六年（1835） 霜月(陰暦 11 月)
	青陽（せいよう）

4　夢咄（現代語訳）

ここに棚尾村の住人　伏見屋平七郎と言う者有り　湊屋のおはまとみつふいたし　親のゆるさぬいたづらなれば　聞より左右の親たちは　不憫ながらも捨ておかれず勘当の身となりしゆへ　これ幸いと思い付き　それより二人の夫婦連れ　今や旅立あらためて　神社仏閣参らんと　氏神様を始めとし　神願こめし八王子　年もよるまいいつまでも　若宮様へ参りつゝ　旅の容易も願わくば無病息災延命と　金毘羅様を伏し拝み　ここも源氏の城跡よ　古き狐の尾先白　住まいをしたる名所也　次に見ゆるは光輪寺　光り輝く寺を越え　思い付いたる第一は旅の路銀の無きゆへに　福徳あたえ多聞山　きどくも見ゆる妙福寺　毘沙門天の福の神　百度参りのその後に不思議や利生も表われて　喜び勇み立かへる　もはや心も安専寺　これより先へ急がんと　ここは出口の別れ道西を指さしあの森は　春日に見ゆる善明坂　神明祈るそれよりも　願い重なる重兵衛山　東浦から東雲の　横雲ひきし朝景色　明けの烏が鼻先へ　鳴きて来るのも頼もしき　誰か忍びの落とし文　拾いながらにメ切って　見れば夫婦がみそひと文字　中畑の森のあちらに火が見ゆる　狐田貫の技であろうぞ　矢作川ここは流れの末なれば　これより上に弓取りも　有も野銭かと鷲捕まえて放さねば　これは小間への渡し舟なり　これは不思議な我が望む　地名の歌の面白さ　ここは川端池端の　連成寺とは有りがたし　これは光明遍成院　十方世界常念仏しゅじょう洩らさぬ請願に　摂取不捨との願隋寺　さても尊い司なり　向うへ越えて眺むれば　故郷へ近き伏見屋と　聞く名も今も懐かしや　ここに借居をしばらくも致してみんや東正寺　お鍬さまにも話しあい　心動かぬ不動尊　ここに稲荷もよけれども　行き先長き旅なればそれへ登れば山の上　見渡す先は山畑の　野中に目立つ	八王子（八柱神社） 若宮様 金毘羅様 源氏 光輪寺 多聞山妙福寺　毘沙門天 安専寺 出口の別れ道 春日社、善明坂 神明社 東浦 メ切 中畑 田貫 矢作川 野銭 鷲捕まえて＝鷲塚 小間 川端連成寺池端連成寺 遍成院 願隋寺 伏見屋 東正寺 お鍬さま 不動尊社

大森は　さよにあらねど中山に　落人の身の悲しさは	稲荷社
昼は楽しみ夜鳴石　思い付いたる我がみさほ　心をつく	山の上、山畑、野中、中山
す貞照院　夫の身命長久と　百渡の水に身を清め　幸い	貞照院
ここに神有と　すぐに北野の天神さま　一生梅をたてま	百渡
すと　願掛けしたる今宵の通夜も　はや夜半と思う頃	神有
向うに見ゆる青い火は　いかがと驚く女気に　さすがそ	天神さま
れとは心付き　それと言わずに取りなおし　五色言葉に	赤はげ山
褒めるなら　暗いその夜に来なさんせ　白い狐が青い火	荒こ＝荒子
を　灯して見せる赤はげ山　これも一つの名所なり　女	二本木
心のとやかくと　荒こわごわと立ち退かん　まだ二本木	住吉権衛山
はおろかなる　唐天竺の果てまでもと　足を早めて急ぎ	鼬穴
行く　ここは住吉権衛山　鼬穴をば掘方の橋を越ゆれば	掘方
四つ辻の広い精界寺に　たれあろうお前のようなる真	辻の秋葉堂
実が　他に一人もあるものか　この行き先は北浦の　近	精界寺
江にあらで湖の　広き眺めの面白さ　長き旅路も秋葉さ	北浦
ん　うみのあちらに見ゆるのは　あれが西端東端　いつ	秋葉社
も春にはあらねども　今は盛りの桃の花　田舎に惜しき	西端東端
眺めなり　あれは西山東山　ここは二つの間の山　おす	桃の花　西端に多い
ぎお玉にあらねども　しまさんこんさん花色さん　ほか	西山東山
むりさん一文私に下されと　袖や袂にすがり付き　口の	
車に乗せられて　財布の銭を取り出し　ばらりばらりと	
銭しぐれ　これこそ旅のうさばらし　油が渕へ落つるな	油が渕
ら　くぐつてなりと　鬼門戸へ出たる所は　畑中の東に	鬼門戸
見ゆるお鍬さま　わしがためには小狭間へ　世々を忍ぶ	畑中
身のあへもせず　たどりたどりて行く先の　ここに横浜	お鍬さま
瓦屋の家業とあれば　様々に鬼の焼いたも据えてある	小狭間
これも話の種ぞかし　弓手に見ゆる鶴ケ崎　めては尾張	たど＝田戸
の亀崎や　松江までも有竹に　見ゆる梅咲く元日の　寿	横浜
そろう名所なり　播磨をここに移せしか　石の宝殿拝む	鶴ケ崎
とは　さても尊や有難や　狭い田尻に専興寺　おしめさ	亀崎、松江
まに尋ぬれば　ここは縁ある前屋敷　せたひを志たる辻	播磨＝新明石

井戸や　すりばち池に巡りあい　新川水を取り寄せて	田尻に専興寺
千福茶釜で　茶を煮たら　おしやぐち様にも一つ上げ	前屋敷
ちそうに出たる水門の　蓋取りて見る塩かげん　橋を上	新川
がれば鶴が崎　新たに寺も西光寺　橋を渡りて道場山	千福
寺のその名も道場寺　次に移りて尋ぬれば　天王村の天	水門
王様　そなたが里の大浜の　おはまと言うも道理也　そ	鶴林山西光寺
れに見ゆるは上の宮　九日節句の祭礼は　弓や相撲や神	道場寺＝道場山法林寺
楽舞　市の商い賑わしき　帰る家への手土産は　生姜熊	天王山法城寺、天王山光専
手にたたき飴　ここに思案の二つ池　心定めて行き先の	寺
あれに見ゆるは　殿様のお城の松に鶴の舞い　今日はの	上の宮
どかな小春也　荒神さまも静かにて　音に聞こえし林泉	荒神さま
寺　うそではないか常行院　金竜山の宝珠寺　瑠璃の光	林泉寺
や宝福寺　竜宮近き海徳寺　十二薬師の妙光寺　寺もき	常行院
れいな清浄院　口に称える称名寺　すなわちこれが西方	金竜山宝珠寺
寺　極楽世界もよそならず　これぞ誠や本伝寺　ありが	宝福寺
た泪をこぼしけり　これほど尊き極楽の　諸仏菩薩にお	海徳寺
っぱなされ　地獄の入りに落ちるなら　かをの赤土や十	十二薬師
王さま　閻魔だいかん庄屋さま　大きな声に叱られて	清浄院
六供も言われぬ悲しさは　娑婆にて嘘を築山や　少しの	称名寺
盗みしたるも　鏡に映る罪とがを　ごどふのみやふかん	西方寺
筆捕りて　書きとめらるる当座帳　泣く泣く向うを眺む	本伝寺
れば　これは無明の橋ならず　棚尾橋を越ゆるなら　賽	赤土
の瓦屋ここにあり　小石を集めて搭を組み　昼は一人も	六供
あそへども　日も入会のその頃に　地獄の鬼が現れて	築山
怖い悲しいその時に　小山どうしょうこうしょうと　泣	棚尾橋＝現在の源氏橋
くより外にさらになし　大慈大悲の地蔵尊　錫杖の柄に	小山
取つかせ　来いよ来たれと引き連れて　港の船に乗せら	
れて　哀れみたもうありがたや　さても冥土の長話　終	
いて元の大浜の　ここは稲荷もよけれども　まだ行き先	稲荷社
の遠ければ　橋を渡りて行く下に　これも名高き三本木	中村
ここにて一句はべりけり　上下残し板橋は　中村に足は	

三本木　化け物の村夫婦もろとも打笑い　竜宮松にと立ち寄りて　八千代重なる茂り松　二人は互いにあり合いの　根上がり松を仮枕　これも浮世の憂さ晴らし　次に移りて大森は　熊野三社大権現　恭しくも詣でして　褒むる言葉も尽きがたし　もはやこれより海辺の　波音近き磯際に　立いで見れば二本松　これも目出度い高砂の相生松の如くなり　南をはるかに眺むれば　洲崎に見ゆる一つ松　志賀の松かと尋ぬれば　傘松と名高き　さてもさてもと横手を打ち　二人は手に手をもやいがさ　たといしっぽり濡るゝとも　今宵一夜は明さんと　燈明の火も力也　月は入るさの満ち潮の　千鳥鳴きたつあわれなり　明くれば又も前浜の　田畑多き長堤　廻りながらに眺むれば　佐久や日間賀や篠島や　神島までもひとかすみ　あら面白の景色かな　最早古里近づきて　煙も見ゆる塩釜や　氏神様の森の松　前と変わらぬ青々と　千歳栄ゆる寿の　我も命の永らえて　勘当ながらも親の顔　又見ゆることのうれしさと　長の順拝夢覚めて　欠伸交じりに話しけり	竜宮松 熊野三社大権現 二本松 傘松 前浜 佐久、日間賀、篠島、神島 塩釜＝塩田の釜

5　あとがき（現代語訳）

此書は棚尾村字本道組（其の当時は新道組と云）小笠原弥左衛門（今の西尾道と岡崎道との岐路の北側に住す油屋と号す）の著述なり　即とくとくと閲するに　物換わり星移り　今は名のみ残りて　其の跡だに定かに分かちがたく　なりぬる所も多し　後の世に夢越探る一助ともなりなむやと　ここにものを侍りぬ 大正七年二月中旬 棚尾村字源氏　七十二翁 永坂杢兵衛正勝　花押	